

文化財をたずねて

No.26

赤穂の塩業遺産をたずねて

発行 赤穂市教育委員会
編集 生涯学習課文化財係
(赤穂市加里屋 81 TEL 43-6962)

赤穂は、雨が少なく晴れの日が多い温暖な気候、千種川河口に広がる遠浅の海、塩田に適した砂で形成された地質などの好条件が重なり、古くから塩づくりが盛んに行われてきた。

赤穂市内では弥生時代終末期(約 1,800 年前)に沿岸部で塩づくりが始まり、古墳時代・飛鳥時代(約 1,700 年から 1,400 年前)にも連綿と塩づくりが続けられている。

奈良時代(約 1,300 年前)から平安時代後期(約 900 年前)には、沿岸部一帯が東大寺の所有する荘園となり、塩を生産していたことがわかっている(『東大寺文書』ほか)。

発掘調査では鎌倉時代(約 700 年前)の塩田跡が確認されており、この頃になると塩づくりが大規模化しつつあったことが知られている。

江戸時代には潮の干満差を利用した広大な「入浜塩田」が開発され、質・量ともに日本有数の塩の産地となった。赤穂塩田の高い製塩技術は瀬戸内地方を中心とした日本各地へも伝えられ、日本の塩づくりを支えた。

このように赤穂の歴史は塩づくりと密接に関係しており、市内には塩業に関連する歴史文化遺産が多く残され、赤穂の歴史の特徴をよく表している。

①東有年・沖田遺跡【東有年】

東有年・沖田遺跡は縄文時代(約 4,000 年前)から中世まで続く大規模な遺跡。ここでは弥生時代終末期(約 1800 年前)の建物跡から、塩づくりに使われた製塩土器が出土している。

製塩土器は赤穂で作られたものではなく、讃岐(香川県)で作られたものである可能性が高い。製塩土器が遠く離れた場所へ持ち込まれることは珍しく、当時の塩の流通範囲や交流などを考えるうえで貴重なものである。現在、遺跡は歴史公園として整備されており、復元された建物を見学することができる。



東有年・沖田遺跡公園



東有年・沖田遺跡から出土した製塩土器(左手前)と製塩土器が入られていた甕形土器(右奥)。

②^{どやま}堂山遺跡【塩屋】

堂山遺跡は縄文時代(約 6,000 年前)から中世まで続く大規模な遺跡である。ここでは弥生時代終末期(約 1,800 年前)から鎌倉時代(約 700 年前)まで塩づくりが行われていたことが発掘調査から判明した。

弥生時代の製塩土器には吉備(岡山県)で使用されていたものと同じ形状のものがあり、弥生時代に瀬戸内地域から塩づくりの技術が赤穂へ持ち込まれたことがわかる。

また、発掘調査で発見された「^{くみしおはましき}波潮浜式塩田」は、発掘調査で確認された塩田としては日本最古のもので、塩田での塩づくりが始まった頃の様子を伝える貴重な遺跡として全国的に有名である。



堂山遺跡周辺



堂山遺跡から出土した製塩土器

③・④古代の塩田関係地名 (③「ハブ谷」・④「^{こはま}古浜」【塩屋】)

奈良時代(約 1,300 年前)になると、現在の赤穂市街地付近に「石塩生庄」「赤穂庄」とよばれる荘園がおかれ、東大寺や西大寺といった大寺院が所有し、塩田を管理していたことが文献からわかっている。

この荘園には「^{はぶ}壱生山」とよばれる塩山(塩づくりのための燃料となる薪を採取した山のこととされる)が存在したことが記録されている。これは現在の塩屋地区高山の山麓に残る地名「ハブ谷」、「ハブ池」、「^{はぶ}波布川」周辺のことと考えられている。高山山麓には弥生時代から平安時代頃の遺跡である高山遺跡もあり、古代の集落が付近に存在したようだ。

『播州赤穂郡志』には「塩屋村は鱧谷よりの出村なり。鱧谷は正面荒神山の後ろ横谷溜池の谷なり。」と記されており、この「鱧谷」も「ハブ谷」のことと考えられる。「ハブ谷」に近い現在の国道 250 号付近や、「古浜」の地名の残る赤穂市古浜町付近に古代の塩田が存在したものと推測される。



高山と波布川



古浜町(塩屋公園付近)

⑤唐船大土手・百間波止【御崎】

江戸時代、塩田開発には防潮堤の建設が必要不可欠であったが、その中でも非常に大規模であったものが唐船大土手である。唐船大土手は、東浜塩田開発のために寛文7（1667）年に浅野家によって建設された巨大な堤防で、千種川河口に存在した唐船山を起点として東西約1 kmにおよぶ。

この唐船大土手から沖合200 mまで伸びる百間波止は、海水の導入口である「水尾」に千種川河口から流れ込む真水の侵入や砂が堆積するのを防ぐために造られたものである。

現在の唐船サンビーチ（海水浴場）の北側の堤防が唐船大土手にあたり、堤防と道路になっているほか、百間波止も現地に残されており、見学することができる。



唐船大土手



百間波止

⑥水尾跡【尾崎・御崎】

塩田に張り巡らされた水路は「水尾」とよばれた。「水尾」は塩田に海水を取り入れるという役割のほか、「上荷舟」とよばれる小型の舟の交通路としても利用された。「上荷舟」は、かん水（塩田で濃縮された海水）を釜屋で煮詰めるために使用される石炭や薪などの燃料の運搬や、出来上がった塩を釜屋から塩倉庫まで運ぶために利用され、赤穂の塩づくりを支える重要な役目を担っていた。

江戸時代から昭和まで利用された水尾跡は、幅を狭めたり暗渠になりながらも水路として現在も利用されているものが多く、住宅街や工業地の間にその名残をみることができる。

また、海浜公園「塩の国」内にも、復元塩田の周辺に当時の「水尾」が残されており、かつての塩田のようすを知ることができる。



住宅街に残る塩田の水尾跡



⑦田淵氏庭園・赤穂市立美術工芸館田淵記念館【御崎】

江戸時代に大規模な塩田が出現すると、次第に塩業や塩を運ぶ廻船業で成功し、塩田を多数所有する塩田地主や豪商が赤穂各地に現れた。

御崎の田淵家は江戸後期に日本最大の塩田地主となった豪商である。この田淵家によって造営されたのが田淵氏庭園であり、当代一流の建築・作庭がなされ、今日でもその姿を残している。その重要性から昭和62（1987）年に国名勝に指定されている。

隣接する赤穂市立美術工芸館田淵記念館では、田淵家から市へ寄贈された美術工芸品や調度品を見ることができ、当時の豪商の華やかな暮らしを垣間見ることができる。



田淵氏庭園



塩田跡地を臨む田淵氏庭園

⑧坂越港・坂越のまちなみ【坂越】

千種川の河口は遠浅の海で海底が浅いために、塩田には適していたが大型船の入港は難しかった。代わって大型船の入港地として選ばれたのが、坂越港であった。

水深が深く、陸側に入り込んだ坂越湾と、そこに浮かぶ生島が船を波風から守る役割を果たし、坂越は天然の良港として中世から港町として栄えた。赤穂塩田で生産された塩は、坂越港からも大坂・江戸・北国・伊勢などへ出荷され、坂越は廻船業を営む商人や豪商でにぎわう港町となった。

坂越には廻船業で栄えた当時のまちなみが今も残り、江戸時代の港町のような姿を今に伝えている。毎年秋に行われる国指定重要無形民俗文化財である「坂越の船祭」では伝統的な木造和船による巡行をみることができ、当時のにぎわいを偲ばせる。



坂越湾と坂越港



坂越のまちなみ

⑨・⑩千種川の水運関係史跡（⑨高瀬舟舟着場跡モニュメント【坂越】、⑩舟灯台【東有年】）

鉄道が開通するまで、千種川では高瀬舟や筏による物資の輸送が盛んに行われた。特に、上流の千種や佐用からは塩づくりのための燃料となる薪が赤穂へ持ち込まれていたほか、上流の村々へは高瀬舟で赤穂産の塩が運ばれていた。千種川による水運も赤穂の塩づくりを支えた重要なものであった。

千種川沿いの村々には多くの船着場が造られたほか、東有年には高瀬舟のための灯台「舟灯台」が設置されている。坂越地区上高谷かみたかやに存在した高瀬舟舟着場跡がモニュメントとして整備されているほか、東有年の舟灯台は現在でも見学することができる。



坂越地区上高谷 高瀬舟舟着場跡モニュメント



東有年地区 「舟灯台」

⑪旧日本専売公社赤穂支局（赤穂市立民俗資料館）【城西】

明治38（1905）年、塩の販売価格安定や日露戦争の戦費獲得を目的として、政府によって塩の専売制が敷かれることになった。赤穂にも塩の生産を管理するため、大蔵省塩務局（後に専売公社赤穂支局）がおかれ、生産した塩を集めて保管する塩倉庫なども建設された。

明治41（1908）年に建築された当時の建物は、日本で唯一現存する塩務局庁舎であり、その重要性から昭和61（1986）年に県指定文化財となった。現在は赤穂市立民俗資料館として公開されており見学できるほか、かつて専売公社が所有していた塩倉庫群についてもその一部が現存している。かつて塩の積み下ろしや運搬が行われた赤穂港や新川、現在も営業する製塩会社などとあわせ、塩のまち赤穂の景観をみることができる。



旧日本専売公社赤穂支局
（現 赤穂市立民俗資料館）



塩倉庫群

⑫赤穂鉄道跡 【加里屋中洲ほか】

大正 10（1921）年に開業した赤穂鉄道は、赤穂市街と国鉄有年駅を接続する鉄道である。赤穂鉄道が開通すると、それまで主に海運・水運によって運ばれていた赤穂の塩は、鉄道を通じて有年駅へ運ばれ、そこから国鉄によって全国へ出荷されるというルートでも出荷されるようになった。

このほか赤穂鉄道は義士観光の観光客の足ともなり、赤穂の都市化・近代化に重要な役割を果たしたが、国鉄赤穂線の開通に伴い、昭和 26（1951）年に廃線となった。

線路跡は市道になっており、現在もそのルートを通ることができる。



赤穂鉄道 旧目坂駅付近



線路跡（高雄地区周世付近）

⑬赤穂の製塩用具（赤穂市立歴史博物館） 【上仮屋】

赤穂塩田は江戸時代から昭和 30（1950）年代頃まで、入浜塩田とよばれる伝統的な構造の塩田であったが、生産効率向上のため流下式塩田とよばれる塩田へ転換していった。

流下式塩田は砂を用いない塩田であったため、人力で砂を集めたり海水をまく必要が無くなり、塩田の地盤を掘り返す「浜鋤^{はますき}」や、伝統的な塩田での作業は姿を消した。

しかし、その際に使用されていた製塩用具は、伝統的な入浜塩田での製塩法を伝える貴重な資料として昭和 44（1969）年に国指定重要有形民俗文化財に指定された。現在は赤穂市立歴史博物館で展示されており、見学することができる。

また、入浜塩田での浜鋤の際に唄われていた労働唄は、「赤穂浜鋤き唄」として平成 19（2007）年に赤穂市指定無形民俗文化財に指定され、現在も赤穂浜鋤き唄保存会によって传承されている。



赤穂の製塩用具



赤穂市立歴史博物館

⑭古池塩田跡・塩釜神社【福浦】

古池塩田は備前国和気郡福浦村・寒河村の百姓によって開発された塩田で、文政6（1823）年に完成した。長らく入浜塩田として製塩を行っていたが、昭和29（1954）年には他の塩田と同じように流下式塩田へ転換した。また昭和38（1963）年に福浦地区は赤穂市に合併し、赤穂塩田の一部として生産を続けた。

しかし、海外産の安価な輸入塩の登場や、イオン交換膜法を用いた製塩法の確立により、流下式塩田も廃止されることになった。

昭和46（1971）年には赤穂塩田廃止に伴い、古池塩田も製塩を中止し、そのまま廃止された。赤穂市街地周辺の塩田跡地は、工場や宅地へと変貌していくなか、古池塩田だけは塩田廃止当時のままの姿で残されており、堤防や枝条架の基礎など、流下式塩田の名残りを今に留めている。

また、古池塩田の背後にある塩釜神社は、江戸時代に古池塩田を開拓する際に祀られたものといわれている。



古池塩田跡



塩釜神社

⑮ 赤穂市立海洋科学館・塩の国【御崎】

昭和46（1971）年の赤穂塩田の廃止により、市内の塩田はその全てがいったん生産を中止し、イオン交換膜を用いた製塩工場での現代的な製塩方法へと転換した。当時、塩の生産方式は日本専売公社を通じて政府の管理下にあったため、伝統的な方法での塩の生産は難しく、伝統的な塩田を残すことも難しかった。

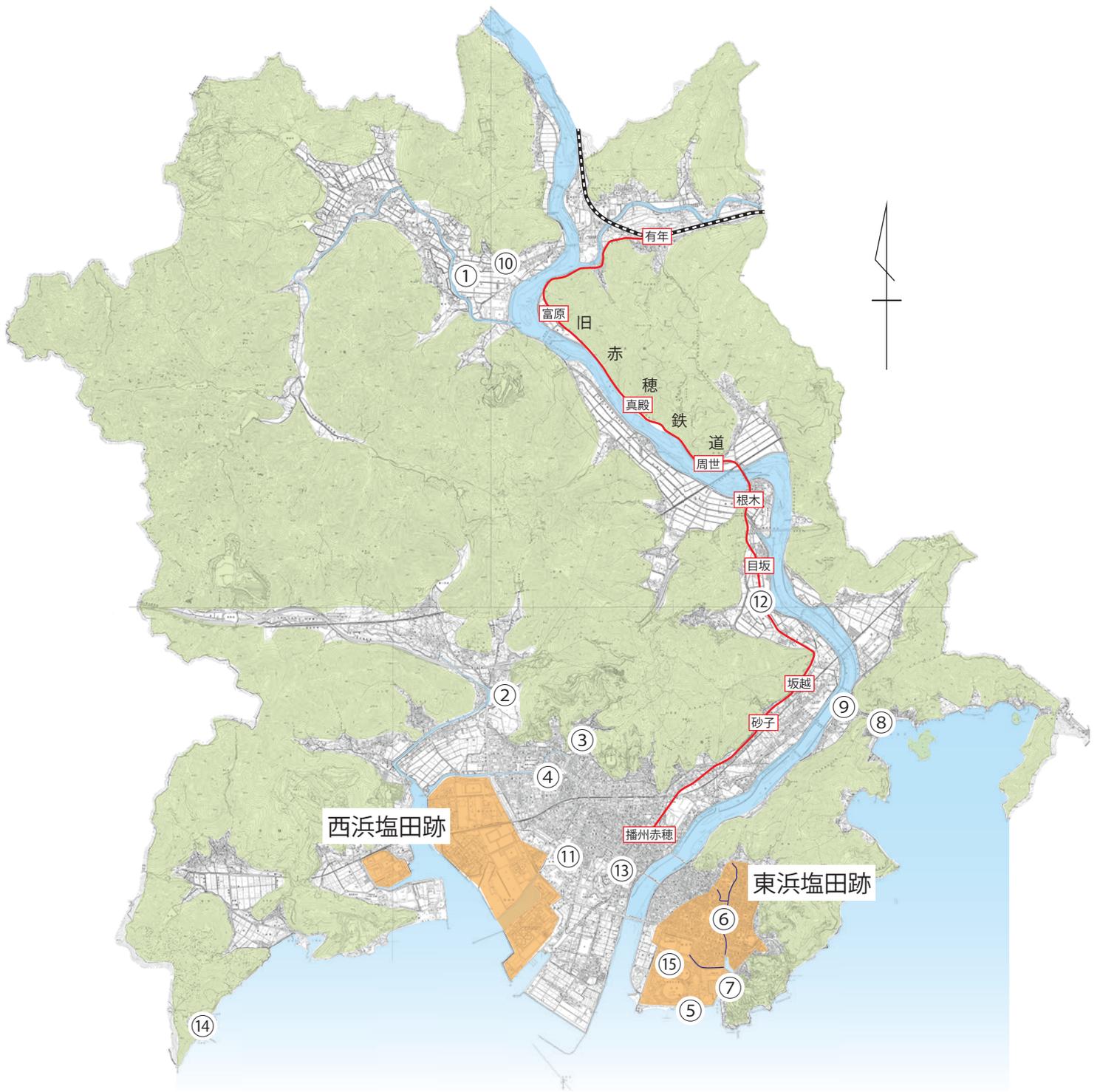
そのため、江戸時代からそのまま伝統的な製塩を行う塩田は残されていないものの、兵庫県立赤穂海浜公園内にある「塩の国」では、各時代の塩田が復元され、現在でも伝統的な方法を用いた塩づくりを見学することができるとともに、塩づくり体験などを行うことができる。また、隣接する赤穂市立海洋科学館では、塩づくりの仕組みや歴史を知ることができる。



復元された入浜塩田



復元された流下式塩田



- | | |
|------------------------|---------------------------|
| ① 東有年・沖田遺跡 | ⑨ 高瀬舟着場跡モニュメント |
| ② 堂山遺跡 | ⑩ 舟灯台 |
| ③ ハブ谷 | ⑪ 旧日本専売公社赤穂支局 (赤穂市立民俗資料館) |
| ④ 古浜町 | ⑫ 赤穂鉄道跡 |
| ⑤ 唐船大土手・百間波止 | ⑬ 赤穂の製塩用具 (赤穂市立歴史博物館) |
| ⑥ 水尾跡 | ⑭ 古池塩田跡・塩釜神社 |
| ⑦ 田淵氏庭園・赤穂市立美術工芸館田淵記念館 | ⑮ 塩の国・赤穂市立海洋科学館 |
| ⑧ 坂越港・坂越のまちなみ | |